凡人から英雄

後藤なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人から英雄

【Nコード】

N1089T

【作者名】

後藤なつ

【あらすじ】

なかがわあきと
仲川明人は

不思議な夢を見続ける青年

その夢は少女が自分に
語りかけてくること

『あたしと一緒に協力して』

毎日ではないがたまに見る

そして明人は……

自分に助けを求めてる人が
現れるのではないかと

心から信じて待っていた。

そしてその願いが叶うとき
青年の新たな歩みが
始まるうとしていたのだ。

その1 始まりの鐘

ねえ、聞いてくれる？

いま、あたしのいる世界が
危機に陥ってしまう状態なんだ

だからあたしと一緒に協力して
あんたとならあたしの世界が
救われる気がするかも知れない

それから…あたしの名前は

最近、不思議な少女が
夢で俺に語りかけてくる

姿は…はつきりと見えなくて
ただ声だけが響いていた

毎日じゃないけどたまに見る
大体、週に2、3回くらい

それを親友に話してみたら
現実逃避と言われたり…

確かにその通りだ。それは
非現実的な内容だろうから

だけど内心、俺は感じている
痛々しいけどたまに思うんだ
俺に助けを求めている人が
いるんじゃないかって

自分は救世主に
なれるんじゃないかって

だからちよつとだけ信じてる
その夢に出てくる少女はいつか
俺の前に現れるだろうと

友達と遊んでいて帰りが
遅くなり、外は真っ暗だ。

時刻は午後9時を過ぎている
携帯で時間を確認すると
母から数件着信が入っていた

しかも留守電が入っていたので
一応、聞いてみることにした

『明人！早く帰ってきてね
お母さん、待ってるから』

母は相変わらずの心配性だ。
でもどの親も子供の帰りが
遅いと心配したくなるのは

当たり前だろうな

これ以上、母に心配を
かける訳にもいかないの
でメールで俺は今から帰る事を
伝えることにする

『母さん、今から帰るよ
心配してくれてありがとう』

送信完了した俺はすぐさまに
家へ向かって走り出した

そしていつの間にか

近所の公園に辿り着いていた

少しだけ見ていこうかな

小さい頃に友達や家族と
よく遊んでいた場所だ

懐かしい気持ちになるなあ

なんて思い出に浸っていると
誰かがブランコに座っていた

それは見たことのない少女で
何でこんな夜遅くにいるんだ？

気になった俺は話しかけた

「あの、ちょっといいかな？」

少女は俺をじっと見つめて
何も話さないでいた

「……………」

それにどう反応したらいいか
俺にはわからなかったが
とにかく話しかけてみる

「君のお家はどこ？
こんな夜遅くに一人で
いると危ないよ？」

苦笑いしながらも
心配して話しかける俺

「ねえ、聞いてよ」

あ…この声は…まさか…！？
この予感は的中していた

少女はブランコから降り
風が吹きはじめていて
彼女の髪がなびいていた

「あたしの世界、ピンチなんだ
皇帝に乗っ取られてさ

次々と人が死んでいったよ

あたしは異世界のお姫様
だけど姫だからって
人々を救える訳じゃない

あたしじゃ、力不足…でも
そんな時に預言者が言った

あたしの世界を救ってくれる
救世主が別世界にいるって

だからあたしは必死に探した
それでようやく辿り着いて
見つかったのがここなの」

え…？俺が…救世主…？
夢でも見ているのだろうか？

しかも聞いたことのある声だし
俺は更に気になった

「あの、実は俺の夢にさ
たまに君と同じ声が
聞こえてくるんだけど…」

試しに彼女に聞いてみた
すると…彼女は

「ああ、あれね…」

あたし、人の夢の中に
語りかける能力があるんだ
それをナイトメアって言うって
それで救世主を探すの

あたしの声が聞こえた人は
救世主で聞こえなかった人は
失礼だけどただの凡人かな？」

俺を救世主だって……？

う、嘘だよな……？

そうだ…彼女は夢の中に
語りかけるって言うけど…

探すのに結構、手間が
かかったんじゃない……？

「え…それってまさか…」

彼女は腕組みで偉そうに
俺に見せつけていた

「そう、あたしの声が
聞こえるのはたった一人！！
それがあんたなんだよ！
喜べ！！救世主だぞ！！？」

いや、喜ぶもなにも…
急すぎてついていけねえ…

「……」

前から信じていたけどさ
まさかすぐに現れるなんて…
取り敢えず彼女の言うことを
信じて俺も行くべきか…

もしくは断るか…という
選択肢が出来てしまった…

さて、どうするよ？…俺

「ん？どうしたの？」

行くか行かないか迷っている
出来れば行きたいけど…
大抵、こういうのって
何か条件があるはずだ…

それを聞いてから決めよう

「あのさ、君の世界に
行くには条件とかあるの？」

恐る恐る聞き出してみる
何か地味に冷や汗が…

「えーっ？なにそれー？
よくわかんないけど
そんなのないよ？」

は…？条件なしって事は…？
や、やったあ！決まりだ！

「うん…わかった！俺も
君のいる世界に行くよ！」

求めていた願いが現実になり
喜びを噛み締めていた俺

ずっと信じていて良かった

「ほんと！？ありがとな！！
じゃあ今から行くぞ！」

すると彼女は服のポケットから
不思議な物を取り出していた

それはまるで宝石のように
綺麗に輝いていた

そして彼女の持っている物は
なんと異常な輝きを増して
眼が開けられない状態に

それから俺の身体は宙に
浮いているような感覚になり

…ここからはずっと
瞳を閉じたままでした

その2 儂い希望

「おい！いつまで寝てんだよ！
もう着いたんだから起きろ！」

彼女に思いつきり頭を叩かれた
あーあ…最悪なお目覚めだな…

もっと優しくしてくれたって
いいんじゃないのか？

…と周りを見渡してみると
そこは確かに異世界だった

だが、しかし瓦礫の山ばかりで
城や家が崩れ果てている

これは彼女の言う通りだ
本当に皇帝に

乗っ取られたんだな…

「久々に帰ってみると
相変わらず無様だよ

あ、そういえばお互い
名前聞いてなかったよね？」

彼女は俺に話しかける前には

切ない表情で回りを見ていた

やっぱり彼女は傷付いている
そうだろうな…

多分、ここはきっと彼女の
故郷だろうから

お姫様って強いのだろうか？

「ああ…俺は仲川明人
明人でいいよ」

「あたしはルミネ・フラット
よろしくな！！アキト！！」

彼女……ルミネは
強くて逞しいお姫様

そして俺を救世主と言って
この世界に導いてくれた女の子

「よろしく」

崩れかけている世界の中で
俺はルミネと今後についての
話し合いをする事に決めた。

「なあ、ルミネ
これから、どうする？」

ルミネは必死に考えている

そして出た答えは 。

「うーん…旅に出る!!」

旅に出るって言っても
何のために出るんですか？
ちゃんと目的がないと…

「あいな、旅に出るって
言っても目的がはっきり
してないと何のための旅が
分からなくなるぞ？」

なんか偉そうに言ってしまった
ルミネの方がきつと俺より
色々と経験豊富だろうに…

「はっきりとした目的…
まずはこの世界を救うには
どうしたらいいか…考えて
それから…えーと…」

ルミネが混乱している。うん
言ってることは大体分かった

「分かった。この世界を
救うには皇帝を倒すんだな？」

ルミネは何故か驚いていた
あれ？何か間違えたか？

「アキト…皇帝は
倒しちゃいけないんだよ」

ルミネは悲しそうに
なりながら話を始めた

俺はそれを黙って聞く

「亡くなったお母さんが
言っていたの…お父さんの
魂が皇帝にあって…もし
倒したらお父さんともう
意志疎通出来なくなるから」

ルミネの親父さんは
皇帝と何があっただ？

「だって皇帝とお父さんは
長年の親友だったから…
優しいけど時に悪どい皇帝
それを何でも受け入れる
お父さんはとても気が
合っていたんだけどね…」

たぶんいずれ知るだろうから
これ以上は聞かない方がいい

「そうか…分かった

この世界を取り戻す為に

「まず仲間を探そうか？」

本当は気になるけど
これ以上、ルミネの悲しむ
姿は見たくないからな

「うん！そうだね！」

ルミネは元気になってくれた
良かった…いつものルミネだ

そしていつの間にか
夕陽は沈んでいきもうすぐ
夜を迎える時が来た

暗いなか木材を集める俺
ルミネの魔法のおかげで
火は使えたから安心した。

「ルミネはスゴいなあ
魔法まで使えるのか！」

パチパチと音が響き渡り
二人で夜を過ごすごすときに…

ここで家族を思い出した
母さんや親友は何を
しているのだろうか…？

さすがに心配しているかもな

「えっ？そうかな？」

お姫様なんだから魔法くらい
使えるようになりなさいって
お母さんやお父さんから
よく注意されてたよ」

ルミネは照れながら言った

「偉いな。良かったら
俺にも魔法教えてくれよ」

ルミネに迷惑かけたくないし
最低限の能力は欲しいものだ

「いいよ！これからの為に
覚えておくんだろ？」

褒められるのがよっぽど
嬉しかったんだろうな

「ああ、そうだ
お願いするよ、お姫様」

するとルミネは赤面していた
なんだ？恥ずかしいのか？

「な…っ…バカ！…！！
調子に乗るのも

いい加減にしろよっ！！！！」

「あでっ！！！！」

何故か激怒されて頭を

また強く叩かれた

素直じゃないお姫様だな…

「アキト……………」

モジモジしているルミネ

こいつは何が言いたいんだ？

「今日はありがと……………」

まさかお礼を言ってくるとは

こりゃあ、たまげたな…

「俺も感謝してるよ」

「……………うん」

ルミネと出会わなかったら

ここにはいなかったから

それで俺の信じていた願いを

叶えさせてくれたお姫様だ

死ぬ気でやって

その3 旅からの再会

仲間を求めての旅…だけど
今、ルミネの知り合いは
いないのだろうか？

そんな事を俺は考えていた

「……………」

ルミネをちらっと見てみると
彼女はボーツとしている

不安になってるのか…？

これからの事とか…

俺を連れてきた事とか…

ちょっと聞いてみようかな

「なあ、ルミネ」

ルミネはご機嫌ななめだった

「知り合いはいるのか？」

その質問にルミネは
ちよつと怒っている態度で
俺に接してきた

「アキトには関係ない！」

イヤなことだったのか…？
うん…それなら謝ろう

「あつ…ごめん…」
イヤなことだったか…？」

俺は何故か緊張していた
だが謝ったのは良いものの
逆に彼女をイヤにさせて
しまうのであった

「余計なお世話だよ！！」
今だけは話しかけんな！！」

な…っ…無理強いだろうに
なんでそこまで怒るんだよ？
こっちは心配してやってるのに

ふざけんなっつもの！！！！

「……おい、ルミネ
なんでそこまで怒るんだ？」

ヤバい…堪忍袋の緒が
切れそうな勢いだ…

「……アキト、あたし

「仲間に出たいよ」

ルミネ…寂しかったんだな
それで強がってたのか

「うん…俺はもう
親友や家族と会えない
かも知れないけどな…」

俺なんか元の世界に
帰れないかも知れないし
ルミネにはいつか会える時が
あるじゃないか…

「えっ？大丈夫だよ？
アクトのいる世界になら
いつでも戻れるから！
そうだ！あたしアクトの
ご両親に出たいな！」

えっ…俺の切なさ返して！！
いつでも戻れるとか
別の意味で驚いたよ…

「俺はいいよ…今はルミネの
仲間が大事だろうからさ」

ルミネの仲間はどこにいるか
わからない状況だったのに
俺が先に大事な人と会ったら

何か複雑な気分だよ……

「アキト……。」

何かツッコつけてんだよ！

でも、ありがとな！」

うーん……まあいいか！

早くルミネが無事に仲間と

会える事を信じて行こう

「ああ！」

その頃、明人のいる世界では

明人の母親……知秋は

涙を流しながらいた様子

「……（明人、何処に

行ったのよ……あのバカ……）」

千明は明人が帰って来なくて

朝から、不安を感じていた

父の晃はたまたま

仕事が休みだったので

母の代わりに家事をしている

両親は不安を抱きながらも

信じて明人を待っていた

そして幼馴染みの

みなさわひろみ
皆沢浩美も

とても心配していた

「（バカ明人…どこで

プラプラしてんのよ…）」

今日は土曜日で

美代子は家にいた……

明人を心配しながら

つじもとかすや
辻本和弥は

明人の長年の親友。

彼はコンビニでバイト中だ

「（まさか明人のお母さんから

電話がかかってくるなんて

あいつ…帰って来てないのか？）」

昨日の夜、和弥は明人と

夜遅くまで遊んでいた

それから明人の母から

電話がかかってきて

色々聞かれたらしいが…

和弥は明人と自分の家で

遊んで夜には帰った明人…

だがしかし明人は

帰ってきていない……

明人がいつも言っていた夢
大して信じていなかったが
まさか本当に……？

和弥は嫌な予感がしていた

明人はまさか誰かに呼ばれて
何処かに行ってしまったのか？

あまり深く考え込むのは
やめておこう。

和弥は気にしない事にした

ルミネと歩いて数時間が経つ
お互い無言のままだ
何だか気まずいなあ……。

「あつ……！」

ルミネが急に騒ぎ始めた
もしかして仲間か……？

「おーい……！ デイゼル……！」

ルミネが手を振りながら
仲間らしき人を呼んでいる

そしてルミネの仲間が

こちらに走って来た

「ルミネ！無事だったんだな！
あれ？見知らぬ人が
いるけど……誰だい？」

彼は俺に指しながら
ルミネに聞いていた…。

「聞けよ！この人は…
なんと救世主なんだぞ！？」

ルミネは…はしゃいでいる
俺の時と全く違うな…

「じゃあルミネが探していた
救世主見つかったんだね！！

初めまして。オレは
デイズル・ランクルだ。」

ルミネの仲間…デイズル…さん？
どうやら幼馴染みって感じだ
うーん…浩美を思い出すな

「はい…俺はアキトです」

いい人って感じがする…
何だか優しいそうだな…

「そっか！アキトくんか！
ルミネが世話になってるね
我が儘過ぎて困るだろ？」

呆れながら話すディゼルさん
そういえば年齢はいくつだ？
俺やルミネより年上って
感じがするけどな…。

「いや、そんな感じは
しないんですけれど…
ところでディゼルさんって
おいくつですか？」

俺は何となく聞いてみた

「ああ、オレは21歳だよ
因みにルミネは18歳だから
するとルミネが怒り出し
ディゼルさんの体を
思いっきり叩いていた

「ディゼルのバカバカバカ！
年齢言うなんてレディに
対して失礼だ！っ！！」

ディゼルさんは
とても嫌がっていた。

「わかったわかった！

「ごめんよ！ルミネ！」

でも楽しそうにしている。
からかうのが好きなのか？

「あ、アキトくんはいくつ？
ルミネと一緒になのかな？」

未だにディゼルさんは
ルミネに叩かれたままだ。

俺は頷いて答えた。

「そっか…年代があ。
これからルミネと
仲良くしてあげてね」

やっぱりディゼルさんはいい人だ
まだルミネは遠慮なしに
叩きまくってるけど
たぶん、それだけ心を
許してるって事なのかな？

「はいっ！」

ルミネ…やめてあげたら
いいのに…ディゼルさん…
怒ったら怖そうだよ…

「ルミネ！いい加減にしろ！」

さすがにこれ以上叩かれると
オレにも限界があるんだけど！」

ディゼルさんはルミネの
頬つぺたを強く引つ張る。

「ふゃあ！ごふえんなふあい！
やふいふうぎまひた！」

ルミネは泣きそうになっていた
おいおい…さっきまでの強気は
一体、何処に行ったんだよ？

「……………」

口出しして止めようとしても
終わらない二人の喧嘩。

どうすればいいんだ…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089t/>

凡人から英雄

2011年10月9日03時15分発行